

英語と日本語の二次述語の比較考察

名前 久保田 舞

はじめに

英語には二次述語(以下 SP と表記)と呼ばれる以下のような文がある。

- (1) a. John painted the roof red.
- b. John ate the meat raw.
- c. John may visit us sober.

(Nakajima (2001:469))

(1)は結果の SP、(2)は目的語指向描写の SP、(3)は主語指向描写の SP をそれぞれ含んでいる。本発表では、これらの三種類の SP の統語的特徴を紹介し、新たに提案する統語構造を用いて説明づけを試みた。

英語の二次述語の統語的特徴

英語における SP はそれぞれ異なる統語的振る舞いを示す。一つ目は、Wh 移動に関する差異である。

- (2) a. How flat did John hammer the metal?
- b.?? How raw did John eat the meat?
- c. * How angry did John leave the room?

(cf. Hoshi (1992: 2))

結果の SP の Wh 移動は容認可能である一方、目的語指向描写の SP の Wh 移動は、容認性が落ちる。また、主語指向描写の SP の Wh 移動は、完全に非文法的であるとみなされる。

二つ目の統語的特徴は、三種類の SP が共起する際、その語順は必ず、動詞 > 結果の SP > 目的語指向叙述の SP > 主語指向叙述の SP であるということである。

また、描写の SP は、意味的な矛盾が生じない限り、主語についても目的語についても叙述可能である。しかし、描写の SP の後に再帰形、代名詞類が続くような場合、その解釈は、どちらか一方に限定される。

- (3) John met Mary angry. (Nakajima (2001: 479))
- (4) a. John met Mary angry at herself. (cf. Roberts (1988: 708))
- b. John met Mary angry at himself. (cf. Roberts (1988: 708))
- (5) a. John met Mary angry at her. (cf. Nakajima (2001: 479))
- b. John met Mary angry at him. (cf. Nakajima (2001: 479))

(3)において angry は主語についても目的語についても叙述可能である。しかし、(4a),(5b)において SP の解釈は目的語指向に限られ、(4b),(5a)においては、SP の解釈は主語指向に限られる。

また、VP や、V'要素の移動を伴う構成素テストの結果から、英語における結果の SP は V'内に生起する項、目的語指向叙述の SP は V'内に生起する付加詞、主語指向叙述の SP は V'外、かつ VP 内に生起する付加詞であることが明らかである。

英語の SP の分析

SP 文の従来の分析は、SP の主語として PRO を想定する立場と、SP 文に特別な叙述規則を想定する立場に大きく分かれている。しかしながら PRO を含む SP 文は、一般的な PRO を含む文とは異なる振る舞いを見せる。また、SP の叙述規則は、複雑な想定を含んでおり、特定の言語における特定の現象についてのみ記述したものに過ぎず、原理的な分析であるとは言い難い。それらのことから、本発表では PRO 分析も、叙述規則に基づいた分析もとらず、移動によって SP の統語的特徴を説明づける。また、本分析において SP とその主語の関係は、併合によって捉えられる。具体的には、目的語の叙述の SP は目的語 DP に直接付加する付加詞であると分析した。また、主語指向叙述の SP は、Sideward Movement 操作を利用し分析した。まず初めに主節主語と SP が付加詞節を構成する。それと同時に主節が構築されるが、その主語位置に動詞の格を受け取るも

のがないため、付加詞節内の主語がコピーされ、そこに併合される。その後、SP を含む付加詞節が主節に併合し、派生が完了する。このような構造を想定すると、併合によって目的語と SP の間の叙述関係は保証され、また、SP と再帰形、代名詞類が共起する事例についても、Binding Principle A, B との矛盾をなく捉えることが出来る。また、wh 移動の可能性の差異についても、正しく捉えることが出来る。上述の通り、結果の SP は動詞が選択する項であり、項の wh 移動は、Chomsky (2000)によって提案された、フェーズ不可侵条件(以下、PIC)の違反を引き起こさない限り可能である。結果の SP の wh 移動において、PIC の違反は見られないため、容認可能である。一方で、目的語指向と主語指向の叙述の SP の wh 移動は、上記の構造を想定すればどちらも付加詞節からの抜き取りであり、それは一般的に禁止されているため、それらの容認性は落ちていると考えられる。ここで、二種類の叙述の SP の wh 移動の可能性にグラデーションがある理由を考察する。目的語指向叙述の SP の場合は、それ自体が wh 移動する場合には、付加詞自体の移動となり、それは一般的には禁止されていない。一方で主語指向叙述の SP の場合は常に、その主語と併合したものが付加詞節となるため、そのような可能性は排除される。

日本語の SP の統語的特徴

日本語においても英語の場合と同様に、三種類の SP がある。また、それらの統語的特徴も英語の場合と類似しており、日本語においても結果の SP の wh 移動は容認可能である一方で、目的語指向叙述の SP、主語指向叙述の SP の wh 移動は容認不可能である。また、VP や V'構成素の移動を伴う構成素テストの結果から、結果の SP と目的語指向叙述の SP の場合はそれぞれ、英語の場合と同様に、V'内に生起する項と付加詞である一方で、主語指向叙述の SP は、英語の場合とは異なり、VP 内、かつ V'外の位置に生起することも、VP 外に生起することも可能な付加詞であるということが明らかである。

日本語の SP の分析

本発表では、上記のような日本語の SP の統語的特徴についても、英語の SP と同様の統語構造を想定し、移動を用いて分析することで説明可能であることを示した。英語の場合と同様に、日本語の目的語指向叙述の SP も目的語 DP に直接付加する付加詞である。また、主語指向叙述の SP の統語構造は Sideward Movement によって構築される。このように想定すると、日本語の SP の wh 移動の可能性について正しく捉えることが可能である。具体的には、結果の SP は項であり、英語の場合と同様にその移動は PIC の違反を引き起こさないため、容認可能である。また、目的語指向、主語指向の叙述の SP の wh 移動は付加詞の島からの抜き取りであるため、容認不可能である。これらは、経験的事実と一致する。

また、日本語の主語指向叙述の SP は、VP 内、VP 外両方に生起可能であるという事実も正しく捉えることが出来る。日本語では、かき混ぜによる語順が許されているため、主語指向叙述の SP は V'外、かつ VP 内の位置に生起した後、さらに VP 外にも移動可能である。主語指向叙述の SP が VP 要素の移動を伴う Pseudo-Cleft の作用域に含まれる例も、含まれない例も容認されるという事実は、SP が元位置に留まる場合、Pseudo-Cleft と共に移動するが、移動後に Pseudo-Cleft がかかる場合には、SP はその作用域に含まれず、移動しないと考えると説明可能である。目的語指向叙述の SP の場合も、統語的にはそのような移動が可能であるが、経験的事実は、それは VP 外には生起できないと示している。それは、目的語指向叙述の SP が同様の移動をした場合、SP とその主語は別の転送領域に含まれることになり、その場合、意味解釈部門においてそれらの間の叙述関係が崩れてしまうからである。

結論

本発表では、英語の SP の統語的特徴について、移動を用いた統語構造を提案することで説明づけた。また、本分析は英語の事実のみならず、日本語のデータについても正しく捉えることが可能であることを示した。

参考文献

- Chomsky, Noam (2000) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Hoshi, Hidehito (1992) "Circumstantial Predicate, PRO, and D-Structure Adjunction," *English Linguistics* 9, 1-20.
- Nakajima, Heizo ed. (2001) *Saishin Eigo Koubun Jiten* (The Latest Dictionary of English Constructions), Taishukan, Tokyo.
- Roberts, Ian (1988) "Predicative APs," *Linguistic Inquiry* 19, 703-710.